

《第 536 回(2026 年 6 月11日) 子どもの本の読書会記録》参加者:10 人

時間:10:00~11:30 場所:オーテピア 4 階集会室

『銀のキス』 アネット・カーティス・クラウド/作, 柳田 利枝/訳 徳間書店

6月は、『銀のキス』を読みました。母が病気で、父とは折り合いがつかない16歳の孤独な少女ゾーイは、美しい少年サイモンと出会います。互いに惹かれあい恋に落ちますが、実は彼の正体は 300 年生きてきた吸血鬼だったのです。

次に、読書会に参加した方の感想を紹介します。

●読んでいて、『ポーの一族』(萩尾 望都/著 小学館)を思い出した。主人公ゾーイの「私のことを分かってほしい」という気持ちに共感が持てず、好きになれなかった。吸血鬼が永遠の命を手に入れても、必ずしも幸せになれるわけでは無いのだと感じた。

●高校生向けのラブストーリーで、ゾーイは思春期真っ只中の少女。孤独を深めた彼女は、吸血鬼サイモンの存在が心の拠り所になる。死を見つめる中で、「どう生きていくか」を考えさせられる。出版されてから25年経っており、再訳すれば今の子どもたちにとって読みやすいものになるかもしれない。

●高校生のゾーイは恐ろしい吸血鬼に臆さず、サイモンのことを信じた。その彼女の持つ勇敢さに注目して読んだ。相手を信じられることが、すごいと思った。最後の場面では、生と死について考えさせられた。

●周りに相談できる人がいないゾーイの孤独感が、AI に自分の悩みを相談する子どものニュースと重なった。「死ねない吸血鬼」と「死に瀕しているゾーイの母」が、生と死の対比として描かれている。サイモンがクリストファーとは違う最期を迎えたことは、救いだったと思う。

●サイモンとは置かれた境遇が違うこともあって、ゾーイがわがまま娘のように映った。「楽しかった時の思い出を壊したくない」「妻が弱っている姿を娘に見せたくない」ことが、父がゾーイと母を会わせたくない理由なのではないかと思った。

●読みやすい文章だった。これまで知らなかったが、ヴァンパイアとは美しい姿をしているものなのだろうか？ネズミの血を啜ったり、獣のようにマーキングをする場面に

ギョツとして、この本が書かれた時代とのギャップを感じた。ゾーイは孤独感を感じているが、両親の仲が良い姿は読んでいてホッとした。

●人と吸血鬼の物語は、その命の長さゆえに最後まで添い遂げることが難しい印象がある。この作品は、ゾーイがサイモンの最期を見届けることができたので、ある意味でハッピーエンドと言えるかもしれない。

●永遠の命を生きることの恐ろしさや苦しさを教えてくれ、限りある命を生きることの素晴らしさに気づかせてくれる吸血鬼のお話が好きで、今回の本もその通りのお話ですごく良かった。サイモンに恋をして、吸血鬼だと知っても協力をしたゾーイに少し引いてしまうが、決して幸せになれず苦しみ続けるサイモンを殺すことが一番の思いやりかもと考えられることにも驚いた。ゾーイは強く正しい道を歩み、きっとママが望むようにパパを支えて生きていけると思う。

●思春期の女の子の話を読むと、自分が大人になって精神的に変わってきたことに気づかされる。人との関わりにおいてタイミングはとても大事で、同じ言葉でも酷い言葉に感じられることがある。吸血鬼など西洋の怪異は不老不死であることに悲壮感を抱くイメージがあるが、妖怪など東洋の怪異は長生きしても元気に過ごしている。これは西洋と東洋の宗教観の違いによる所が大きいのかかもしれない。

●この本に出合えて良かった。命は生まれてきたら、必ず死んでいくものだ。人の後始末は誰が責任を取るのだろうか。自分を見つめていくことを怠らず、命の尊厳について1人1人が考えていく必要がある。

次回 7 月 9 日(木)10:00~11:30 オーテピア 4 階集会室

☐『ポジション! POSITION!』 高田 由紀子/作 岩崎書店

※申込み・参加費は不要です。